

平成 27 年度 千歳村文学講座

徳富蘆花を知る

— 粕谷の地で明治・大正期 20 年を過ごした文豪「徳富蘆花」を学ぶ —

| 回 | 開催日 | 時 間 | タイトル | 講 師 |
|----|------------|-----------|---------------------------------|-------|
| 1 | 4月 21 日(火) | 10 時～12 時 | 写真で見る蘆花の生涯 | 森下 泰男 |
| 2 | 4月 28 日(火) | " | 蘆花の文学とは (蘆花出世二作「自然と人生」「不如帰」) | 生田 美秋 |
| 3 | 5月 12 日(火) | " | 蘆花が愛した粕谷周辺と蘆花恒春園散策 | 倉本 俊幸 |
| 4 | 5月 19 日(火) | " | 自然文学の金字塔「みみずのたはこと」 | 渡邊 熱 |
| 5 | 5月 26 日(火) | " | 蘆花青春小説の虚と実 「思出の記」と「黒い眼と茶色の目」 | 布川 純子 |
| 6 | 6月 2 日(火) | " | 大逆事件と蘆花「謀叛論」 | 平出 洋 |
| 7 | 6月 9 日(火) | " | 兄弟の相克と葛藤 一蘆花と兄・蘇峰一 | 渡邊 熱 |
| 8 | 6月 16 日(火) | " | 日露の人的交流と蘆花 | 中村 孝 |
| 9 | 6月 23 日(火) | " | 蘆花 50 年の懺悔と愛の福音「新春」 | 布川 純子 |
| 10 | 7月 4 日(土) | 14 時～16 時 | 【公開講座】明治大正期の千歳村について | 下山 照夫 |

※7/4 の公開講座のみ、土曜日の 14 時～16 時の予定です。

写真で見る蘆花徳富健次郎の生涯

徳富蘆花健次郎は明治の文豪、肥後の生まれ、蘇峰の弟、同志社中退。「不如帰」・「自然と人生」により世に認められる。キリスト教人道主義に立つ作品で人気を得た。作品は「思出の記」「寄生木」「みみずのたはこと」「死の蔭に」「黒い眼と茶色の目」「新春」「日本から日本へ」「富士」。

大逆事件判決に対しての第一高等学校での「謀反論」の演説は人道主義に基づく国家権力への激しい反発として高い評価を得ている。

◎蘆花文学の底にあるもの。徳富一族は優れた日本の文化家族であり、熱心なクリスチヤン家族でした。この血統に恵まれ健次郎は育ちましたが、同時にまた、この大家族主義から来る圧迫にも絶えず苦しみました。封建的な日本の家族制度・社会制度に対する長い戦いの中から蘆花文学は生れました。(神崎清著作より)

◎蘆花の文学のジャンルは大きく次の七つに分かれます。第1は史伝類、トルストイ伝、竹崎順子。第2はエッセイ類、自然と人生、みみずのたはこと。第3は紀行類、順礼紀行、死の蔭に、日本から日本へ。第4は小説類、不如帰、思出の記、黒潮。第5は自伝小説、黒い眼と茶色の目、富士。第6はキリスト的人道主義に基づく世界平和、四海同胞、暴力否定、人命尊重、謀反論、太平洋を中心として。第7は日記、現在刊行されているのは大正3年5月5日から大正7年12月31日まで。日記は亡くなる年まで。

◎蘆花健次郎と愛子夫人、明治27年五月、健次郎は原田愛子と結婚、愛子は東京女子高等師範学校(現在の御茶水女子大)卒業、実家は熊本県菊池の名望家。健次郎の選んだ愛子は生涯の伴侶に値する女性であった。無邪気な少女は熊本を代表する名家と名家の組み合わせの枠内で日本の習慣に従い結婚したが、蘆花健次郎の感化を受けて、人間的に成長し、独立した妻の地位を打ち立て、純粋な夫婦愛を創造したいと真剣に考えようになった。互いに問題の本質をごまかすことが無かつた。毎日の家庭生活においては激しい対立や衝突がしばしば繰り返された。蘆花文学における愛子夫人の役割は、蘆花文学の内助者から、しだいに協働者の地位にまで高まっている。晩年の「日本から日本へ」・「富士」が夫婦の共著になっている。(神崎清著作要約)

◎蘆花健次郎の人柄、これほど矛盾、撞着、欠点だらけの人間は珍しい。第一に我儘人間であり、それでいてまた、これほど正直一徹の人間もまずいない。恐るべき癪癖持ちで、女好きで、衝動的で、嫉妬深く、全くと言うほど、抑制が効かない。その癖他方ではひどい弱虫、偏屈、たえず劣等感と悔いに苛まれている。誰しも多少の差はある持っているが、健次郎の場合その振幅が余りにも大きい。この矛盾と撞着の中にあって彼が終生追い求めたのが「苦しいまでの真実一路」だった。(中野好夫著書より)